# 岡山大学の人々2

第2回目は、卓球の上級国際審判員として活躍中の教育学研究科・瀬田幸人教授です。

**瀬田　幸人（せた　ゆきと）**
昭和28年、鳥取県日野町生まれ
東京都立大学大学院人文科学研究科修士課程英文学専攻修了
昭和58年、本学教養部に講師として採用
教育学部准教授を経て、現在、教育学研究科教授

紹介する瀬田幸人先生です。瀬田先生は本学教育学研究科で英語教育の教員をつとめるかたわら、卓球の審判員として活躍。難関の数種類のテストを突破し、国内では二人目（男性では初めて）となる国際卓球連盟「ブルーバッジ」国際審判員資格を取得したことで知られています。

平成二〇年に開催された北京オリンピック。その卓球競技に日本からただ一人審判員として参加したのが、今回ご

中学校では卓球部に所属。球をテグスで天井から釣って、それを打ってフォームを矯正するなどの努力が実り、県大会で個人三位という成績を残しましたが、「そこで燃え尽きて」卒業後はしばらく卓球から離れていました。

卓球熱が再燃したのは、本学に赴任後。学生と卓球をし、その面白さを再発見。社会人の卓球サークルに入り、「健康のためだけでなく、試合に勝つ」ことを目標に卓球に打ち込むようになりました。

その後、英語力を買われ、国際大会でボランティアの通訳をつとめたことから、岡山県卓球協会の国際部の委員長に就任。国際大会開催のため、国際審判員の資格を取得しました。

審判員の役割は、試合を適正に運営すること。国際試合では、ネットの張り具合からラケットのラバーの厚さに至るまで、ルールが厳密に決められており、審判員がそれをチェックし、違反者には厳しい態度で臨みます。そしてなによりも、さまざまな突発事態に対し、的確な判断を瞬時に行うことが求められます。世界が注視する中、沈着冷静にミスなくジャッジを行うのは、非常な重圧です。

それでも瀬田先生は、「審判員は面白い」と語ります。醍醐味は、主審と副審が連携して試合をつつがなく終了させたときの達成感。それから、なんといっても、「世界のトッププレーヤーたちを間近に見られること」。審判員はプレーヤーたちの鼓動・息づかいまでが聞こえるほど近くにいるため、彼らのメンタル面の動きも感じられるそうです。

北京オリンピックは、「それまでの国際大会とは全然違った」そうです。オリンピック独自のルールも存在するし、セキュリティも段違いに厳しい。しかし、いちばん感じたのは「選手の気迫」。四年に一度しかなく、競技人生の中で二度と迎えることができないかもしれない大舞台で、選手の気迫には鬼気迫るものがあり、審判員としても、いつにもまして緊張感を感じたそうです。

「熱戦の果てに敗れたハンガリーのクリスティナ・トート選手が、負けたにもかかわらず、主審の私と握手をする際に、『サンキュー』と言ってコートを去った。敗者から『サンキュー』と言われるのはそれがはじめてだった。公正で的確な審判を行ったことへの心からの感謝が感じられて、『審判員をやっていてよかった』と。さらに、自分が負けて悔しいのに、人に感謝できるなんて、ととても感動した」。これが北京オリンピックでのもっとも印象に残っているエピソードとのこと。

教員として本学学生に感じるのは、「ちゃんと自分の頭で考える習慣がついていて、しっかりしている」ということ。しかし、「おとなしくて、ハングリー精神に欠けている一面もあるように思われる。積極的にやりたいことを見つけて、自分のフェンスを越えて欲しい」とアドバイスします。

夢は、今後も教育研究と国際審判員を両立させること。国際審判員としての当面の目標は、もちろんロンドンオリンピックへの参加。瀬田先生は目標に向け、ルールの勉強や動体視力の鍛錬など、日々の努力を怠っていません。ロンドンオリンピックで先生の姿が見られることを期待しましょう。